ISSN 1347-5142

写真１　ブータンの最も高い山ガンカプンツム直下のポドゾル地帯の風景

写真２　ブータンの国花　ブルーポピー

かわはく No.34

CONTENTS

あすの『かわはく』づくりのために～指定管理者としての初年度をふりかえって～……2
世界の屋根ヒマラヤの穴の中から地球環境を見る……3
お客様に楽しんでいただくために～交流員の仕事～……4
渓流観察窓バックヤード……5
電子顕微鏡の世界（７）　～電子顕微鏡操作研修会～ ……6
第１展示室スロープ部分展示「浮世絵をたのしむ」……7

埼玉県立川の博物館
SAITAMA MUSEUM OF RIVERS

あすの『かわはく』づくりのために

～指定管理者としての初年度をふりかえって～

《おもてなしの心でお客さまに満足を提供》

2008年４月１日、私たち株式会社乃村工藝社に所属する館長以下30名のスタッフにより､｢かわはく｣の管理運営業務がスタートしました。この時期は学校の春休みにあたりウオーミングアップもそこそこにいきなり本番に臨む、といった心持ちでした。民間企業が博物館の管理運営に携わること、その特徴をどこで発揮するか、それには、昨年度まではどうだったか、それを把握しないまま展望を開くことは叶いません。まずは、継続性の原則を胸にじっくりこの眼で確かめるところから始めました。

この指定管理業務を推進するうえで､お客さま、設置者である埼玉県庁、そして会社の三者三様それぞれのWINを獲得することが大切である、とされています。まずは、何にも増して来館されるお客さまにご満足やご納得をいただける状況を作り出すことが第一、次に設置者の制度導入のねらいに応えること、第三に民間企業としての広い意味での経営効率性を確保すること、すなわち３者にとってのWINを作り出すことです。

私は、この仕事が始まる前に全所属員に対し、三者のWINのほかに私たち「かわはく」のスタッフが心底からこの博物館に愛着をもって仕事に臨むこと、これが原点になる、という話をしました。“おもてなし”の心をもって誠実にすすめることを確認しあいました。

《春休み、GW、夏休みと息つく暇なし》

当館は小中学生およびファミリー層、中高年層と幅広い顧客層を維持してきたことがひとつの特徴でもあります。各位各層のみなさまに納得いただけるだけの施設環境になっているか、どこが不足していることはないのか、その検証も並行して進めていかなくてはなりません。そのためには、春休みから５月の連休、そして当館にとって最大のピークである夏休み期間までどのように対処していくかが課題でした。実際にはそれらの時期を意識した季節ごとのおまつりと企画展や特別展さらには、各種教室・講座・講演会、テーマを絞った毎月の「かわはくサタデーミュージアム」を織りまぜながら展開していきました。小規模なイベントでも、気象条件や安全面に配慮しつつ、お客さまに何かあってはいけませんので､慎重に計画、実施していきました。また、７月には、埼玉県主催の「みどりと川の再生　埼玉フォーラムイン寄居」が当館を会場に開催され、多くの参加者に足を運んでいただきました。このようにして、ひとつひとつていねいにすすめていきました。

《地域に根ざした文化施設をめざして》

元来、地域の博物館はその圏域の文化的拠点として機能すべきとして、地元市町村、小中学校・高校・大学などの教育・研究機関や福祉施設、さらには鉄道やバスなどの公共交通機関、また商工会や観光協会をはじめとする地域経済団体などとの連携も欠かせないと考えました。地元の小中学校を通じて､キメ細かく情報を提供し来館を促し、学校教育のプログラムに当館の機能を取り入れていただくよう働きかけをおこなう一方、児童生徒さんの社会体験活動のお手伝いをさせていただくなど、双方向のやりとりを実施してきました。また、シーズンごとのイベントには、地域の商店のみなさんにお願いして出店していただき、楽しい雰囲気を作り出してしていただくとともに、演奏家を招いて楽しい音楽会も開催していきました。

《次のステップアップのために》

このように私たちの管理運営活動は、来館者のお客さまをはじめ、博物館をとりまくみなさまのお力添えを得ながら着実に歩を進めてまいりました。しかし、一方では改善すべき点も見えてきました。施設ハード面では経年劣化により補修が必要な箇所があり、お客さまの安全配慮の観点から優先順位を決めて改修に努めてきましたが、気になる箇所はまだあります。逐次手を打っていくこととします。また、運営面ではより多くの方々に｢かわはく｣のよさを理解していただくためにもっとPRに努めなくてはならないと思っています。お客さまの声を活かしながら、地域の文化的拠点として、また居心地のよい環境を創造していくために、スタッフ一同で今日も地道に努力を傾注していく所存です。

（統括マネージャー　藤原信一郎）

世界の屋根ヒマラヤの穴の中から地球環境を見る

土壌を研究しているといえば、魚の「ドジョウ」と勘違いされることが多い。穴にもぐって大地と語り合う世界に住んでいます、といえば聞こえがよいが、泥まみれであるのは「ドジョウ」とあまり違いはない。

一昨年ブータンという、国民総幸福度で有名なヒマラヤの小さい国で土壌を調べる機会に恵まれました。いくつかの段丘をもつ盆地の古都プナカは、その肩のところに赤色の土壌が広がっています。谷全体が、真っ赤に見えます。熱帯地域なら十分考えられますが、プナカの現在の気候下では、赤色の土壌は出来にくいので、この土壌は非常に古い時代にできた化石の土壌であろうと思われます。過去の気候下で出来た土壌が、地表面に残っているのが化石土壌です。土壌は、岩石が小さくなったものに、周りの気候などの環境を反映し、生き物が関与してできた自然物です。その地域の自然の歴史を閉じ込めた履歴書といえます。ただそれをひも解いて読み取ることは、今の土壌学のレベルではできません。ヒマラヤの出来方を土壌から見てみたいものです。標高2000mのプナカから、さらに奥地へとトレッキングした4000mの河岸段丘上にポドゾル土壌が分布していました。そこは赤い低木のシャクナゲが咲き誇り、くぼ地にはサクラソウの仲間、岩陰にはブルーポピー（表紙写真２）、岩礫斜面にはトウヒレンの仲間（写真２）が咲いているところで、非常に幻想的な風景でした（表紙写真１）。ポドゾルとは、ロシア語で、下に白い灰がある土壌という意味です。冷涼な気候の北極に近い針葉樹林の下に広がっています。垂直方向つまり標高が高くなっても、同じような土壌が出てきます。日本では、北アルプスや中央アルプスのハイマツの下によく分布しています。垂直分布的にも、ヒマラヤに存在していることが証明されたことになります。これより奥は、氷河が見られるところですが、疲労のために足が進みませんでした。氷河の端モレーンを遠くに見て引き返しました。

古都プナカには、ゾンというお寺、裁判所それに役所を合わせた非常に美しい建物があります（写真1）。この谷の上流で氷河湖が決壊したときには、洪水に見舞われゾンも水に浸かったそうです。今温暖化で、ヒマラヤの氷河が融けることが非常に問題になっています。あの時もっと元気を出して氷河まで見てくればよかったと思っています。きれいなブータンヒマラヤでしたが、地球環境を考えるともう一度訪ねたいものです。

（研究交流部　平山良治）

写真１　古都プナカを象徴するプナカゾン

写真2　高嶺の花といわれるトウヒレンの仲間

お客様に楽しんでいただくために

交流員の仕事

川博で制服を着用している「交流員」と呼ばれているスタッフは、来館されたお客様のご案内を始め、様々な接客サービスを行っています。

今回は、お客様に直接携わっている「交流員」が、日頃どんな事をしているのかご紹介します。

まず、毎朝各展示物の点検を行い、お客様をお迎えしています。施設の不備や不具合箇所がないか目を配り、お客様に安全に楽しんでいただくよう心がけています。

来館されたお客様には展示物のご案内や、皆さんが荒川の事に興味を持ち、理解していただけるよう「鉄砲堰」や「荷船」といった実演イベントも行っています。尚、４月からは新たに「船車」という展示物のイベントも始まりますので、ぜひ楽しみにしていてください。

ワークショップでは、普段はペットボトルを使った簡単な実験を行っています。

また、季節のワークショップを交流員が企画し、催しています。節分の「鬼のお面作り」では、皆さん様々な色の個性豊かなお面を作っていました。帰りに、作ったお面をかぶりながら「かっこいいでしょ！」と見せてくれる男の子や「パパに作ったよ！」と見せてくれる子の笑顔が嬉しかったです。「折り紙」を使ったワークショップでは、以前来館した時に折り方を覚えたという女の子が、「コマが折れるようになったよ。お友達の分も折ってあげるの。」と交流員に見せてくれました。今回は「雛人形の折り紙」に挑戦です。

３月20日からは、いよいよ外の施設わくわくランドも開園します。ここでは、お子様が水の科学を学びながら、安全に楽しく過ごしていただけるよう目を配っています。

交流員は、皆さんが笑顔で「楽しかったよ」「また来るよ」という声をかけてくださることにやりがいを感じ、毎日頑張っています。

これからも、少しでも皆さんの思い出作りのお手伝いができるよう、明るい笑顔と心あるサービスを提供していきます。

交流員仕事風景

渓流観察窓バックヤード

現在、渓流観察窓では大水槽１基と中小水槽10本の「展示水槽」に魚類20種その他８種、計270匹程の生物を展示しています。バックヤードには11本の「予備水槽」があり、展示予定の魚の餌付けをしたり大きく育てる水槽、病気や怪我をした魚を治療する水槽、以前展示していた魚のリハビリをする水槽などです。展示を維持していく上では予備水槽での飼育はとても重要になります。

常に綺麗な水槽で元気にいきいきと泳いでいる魚を見ていただく為に「展示水槽」「予備水槽」共に毎日の測温や給餌、定期的な水槽の換水や掃除等の作業をしています。

今年の夏からこのような飼育管理をしてくれている新人の毛利さんと保野さんに話を聞きました。

●毛利さん

私がこの渓流観察窓に勤務したのは、昨年の７月からでした。夏というお客様の一番多い時期だということもあり、どのようなレイアウトなら見やすいか、どのような説明なら分かりやすいかなどを考えながら作業をしておりました。特に毎週日曜日に行う餌やり体験のプログラムでは、魚の解説にジェスチャーを交えたり注意事項にも笑いを含みながら話したりなど少しでも楽しめるよう努力をしました。そんな工夫が実って、お客様に「楽しかった」と言われると、私もとても嬉しくなり、この仕事を始めてよかったなぁと思いました。そんな僕がお勧めする生き物はモクズガニです。大きな体にフサフサのハサミ。本当に荒川にいるの？と思わせるような生き物を是非楽しんでください。

モクズガニ

●保野さん

魚の飼育という今まで経験のないこの世界に入り半年が経ちました。餌をあげるだけでなく、水槽の水換え、掃除、又お客様に見て頂く為のディスプレイを変える事も大切な仕事です。

どの生物も様々な性格や相性といった“顔”があり、例えば現在展示されているテナガエビは自分の顔や触覚を前の手でせっせと磨くとてもきれい好きな性格をしています。

特に気に入っている魚はカジカです。縄張り意識が強く口を大きく開けて相手を威嚇する姿はそれとは想像できない程ひょうきんな顔をしています。

水の中で生活をしている生き物を間近に見る機会のできるこの渓流観察窓では皆さまにそういった“顔”を知ってもらい命の尊さを感じて帰ってもらえたらと願っています。

カジカ

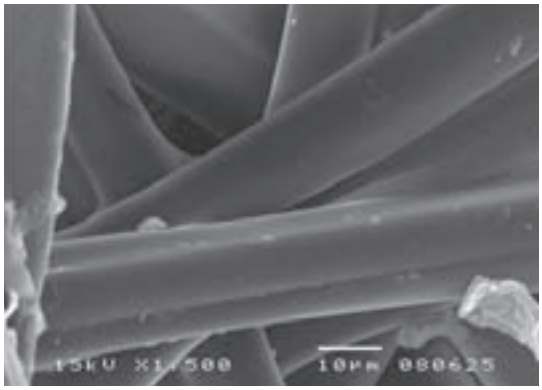
電子顕微鏡の世界（7）～電子顕微鏡操作研修会～

電子顕微鏡とはその名のとおり、電子を利用して物体を観察する顕微鏡です。光学顕微鏡よりも細かい物まで見えるのが特徴で、1万倍を超える倍率での観察が可能です。

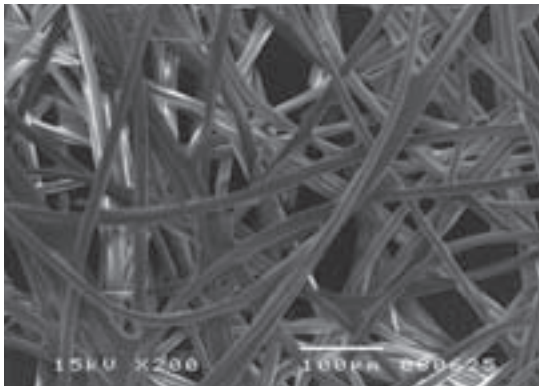
埼玉県立川の博物館では、走査型電子顕微鏡（略称SEM）を所有しております。当館ではSEMを積極的に活用していただくことを目的に、県内の先生方を対象にした電子顕微鏡操作研修会を、毎年開催しております。今年度も30名を超える募集があり、参加は抽選となりました。参加していただいた先生方はいずれも熱心で、今年も多くの電顕写真が撮影されました。

平成21年度も研修会の実施を予定しております。SEMを利用することで、普段なかなか見る機会のないミクロの世界を垣間見ることができます。電子顕微鏡で撮影した写真は、教材として活用することもできます。ぜひともご参加下さい。

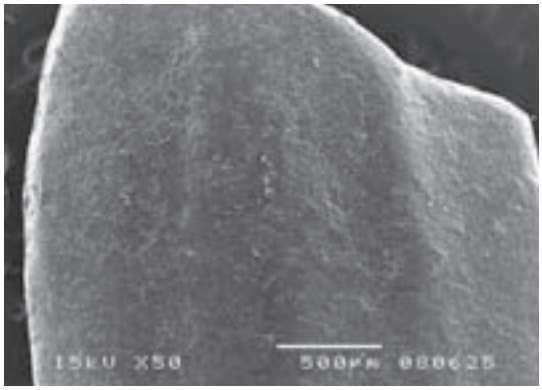
（小林まさ代・研究交流部）



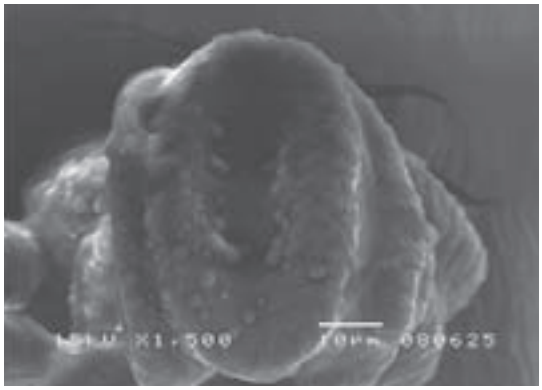
埼玉県立羽生第一高校　内田智生教諭撮影
「カイコガの繭」



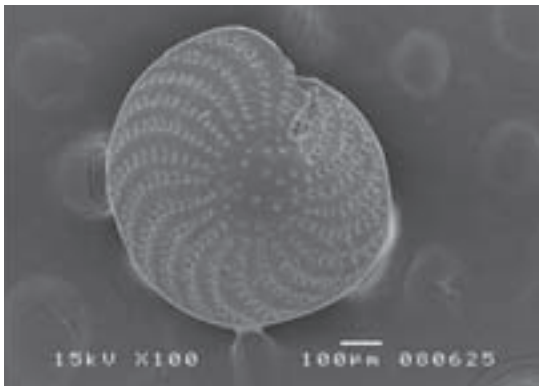
深谷市立深谷中学校　斎藤恵子教諭撮影
「油こし紙」



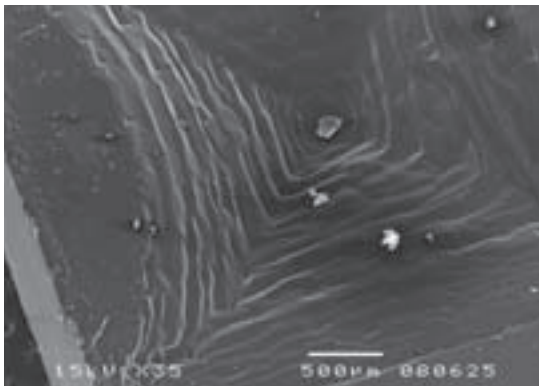
埼玉県立小鹿野高校　本田章教諭撮影
「白米」



埼玉県立坂戸西高校　中井裕子教諭撮影
「ユリの花粉」



埼玉県立児玉高校　栗原直樹教諭撮影
「有孔虫」



鶴ヶ島市立藤中学校　大丸快哉教諭撮影
「食塩の結晶」

第１展示室スロープ部分展示

「浮世絵をたのしむ」

第１展示室スロープ部分でのパネル展示は、近年自然系の内容で定期的に展示替えが行われてきました。季節の移り変わりや専門的な内容まで幅広く、興味深い内容が多くありました。一方で、この展示室は民俗的内容が大部分を占めており、こうした常設展示内容との関わりはあまりなかったと言えます。

昨年12月より始まった「浮世絵をたのしむ」は、浮世絵をテーマに常設展示との関連性も考慮し、展示を行いました。この展示の主旨は、さまざまな浮世絵の見方を知っていただこうというもので、普段美術品として観ている浮世絵をぐっと拡大してみたり、一枚の浮世絵の登場人物を抽出してみたり、現在の出版社にあたる版元を示した版元印に着目してみたりと、次に実物資料の浮世絵を観る際にこれまで以上におもしろく観ることができるような内容としました。そうした中で、荷物を運ぶ荷船の描かれたものや、時代は前後するものの鉄砲堰に関わり木材を筏に組んで江戸へと運ぶ姿を描いたものなど、常設展示に関係させたものを意識しました。

また、ワークシートというかたちで展示の補完を試みました（図１）。荷物を運ぶ役割を担っていた荷船など船に注目したもので、こうした形で改めて展示をじっくり見ていただければ幸いに思います。

第１展示室スロープ部分は、壁面へのパネル展示が大部分であり、他の展示の効果を意識した照明の暗さから、あまり着目されづらい展示空間と言えます。そうした中で、いかに興味深い試みが可能か、模索していきたいと考えています。

（研究交流部　五十嵐睦）

「浮世絵をたのしむ」展示風景

版元印をたのしもう

浮世絵に見る船

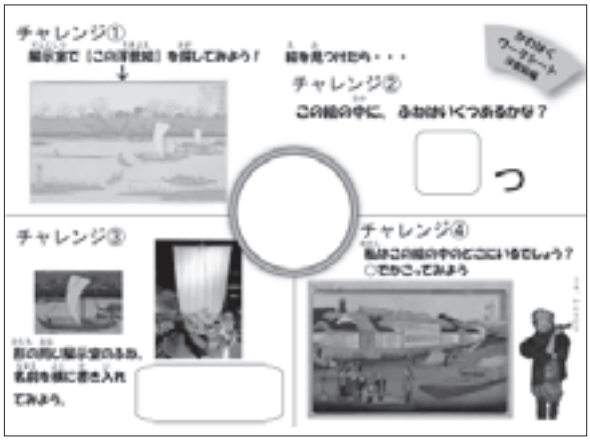


図１　「浮世絵をたのしむ」ワークシート

4月

3/20/金～5/10/日

春期企画展「カエル・かえる・蛙」
内容：川にすむカエルに注目します。カエルの生態から、最新のカエル研究事情までを紹介します。

4/土 **かわはくで遊ぼう「紙でカエルをつくってみよう」**
時間：13:30～15:00　定員：25人（申込順）☎
費用：100円
内容：春期企画展にちなんでペーパークラフトでカエルをつくります。

18/土 **かわはくサタデーミュージアム「かわせみ河原の生き物を探しに行こう」**
時間：10:30～12:00　14:00～15:30
定員：各回25人（申込順）☎
費用：100円（保険料）
内容：かわせみ河原にいるさまざまな生き物に注目してみます。

5月

2/土～5/火

GW特別イベント
時間：10:00～16:00
内容：一日たのしく遊べるイベントを実施します。

5/26/火～6/21/日

6月企画展『荒川ゴミマップ』
内容：荒川にあるゴミをクローズアップします。

9/土 **地質の日記念かわはくサタデーミュージアム「石と泥のアクセサリーつくり」**
時間：10:30～12:00　14:00～15:30
費用：200円（材料費）
定員：各回32人（申込順）☎
内容：石や泥を利用して簡単なアクセサリーを作ります。

かわはくで学ぼう!! イベント情報コーナー

6月

6/土 **かわはく体験講座「川の生き物観察」**
時間：13:30～15:30
定員：20人（申込順）☎
費用：100円（保険料）

7/日 **環境の日記念イベント**
時間：10:30～　13:30～　の2回
内容：水の汚れを水質調査で調べてみよう

13/土 **かわはくサタデーミュージアム「ハチミツの花粉を調べてみよう」**
時間：10:30～12:00　14:00～15:30
費用：100 円(材料費)　定員:各回25人(申込順)☎
内容：ハチミツの中に入っている花粉を拡大して観察します。

21/日 **荒川ゼミナール「隅田川と江戸の町々」**
講師：久染　健夫氏
時間：13:30～15:00
定員：80人（申込順）☎
内容：荒川の下流、隅田川を中心とした江戸時代の経済事情などについて考えます。

7月

7/18/土～8/31/月

特別展「埼玉圏の原始・古代人–人の動きをモノから探る–」
埼玉‘圏’の原始・古代人のくらしを、特に人とモノの動きをテーマに見て行きます。

5/日 **川の日記念イベント**
時間：10:30～　13:30～　の2回
内容：願いを込めて荒川大模型に七夕飾りをかけてみませんか。

11/土 **かわはくサタデーミュージアム「箱メガネで川の中をのぞいてみよう」**
時間：10:30～12:00　14:00～15:30
費用：200 円(材料費)　定員：各回25人(申込順)☎
内容：箱メガネを実際に作って、川の中を観察してみます

12/日 **荒川ゼミナール「荒川中流域の地場産業」**
講師：沼野　勉氏
時間：13:30～15:00　定員：80人（申込順）☎
内容：荒川でも特に中流域に的を絞って、地場産業を考えます。

25/土 **講演会「埼玉圏の原始・古代人」旧石器・縄文・弥生時代編**
講師：栗島　義明氏、鈴木　徳雄氏、柿沼　幹夫氏
時間：13:00～16:00　費用：無料（入場料のみ）
定員：80人（申込順）☎
内容：旧石器・縄文・弥生時代の人々のくらしについて各分野第一線の研究者の話を聞くことができます。

26/日 **かわはく夏祭り**
時間：10:00～16:00
内容：各種子ども向けイベントを開催予定。

ホームページでも紹介しています！　http://www.river-museum.jp/index.htm

【お願い】①行事は都合により変更になることもあります。ご了承下さい。②☎印のついた行事は事前申込みが必要です。電話またはFAX、Eメールでお申し込みください。③定員になりしだい締め切ります。④川の情報もお寄せ下さい。

■編集・発行
埼玉県立川の博物館
〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園３９番地
TEL／048-581-8739(研究交流部)　FAX／048-581-7332
Eメール／web-master@river-museum.jp
PRINTED WITH SOY INK
彩の国さいたま
2009年３月31日発行